

女性の顔形態特徴がメイク行動に与える影響

—メイクの対人相互作用を中心に—

九 島 紀 子*¹・上 瀬 由美子*²

The Influences of Women's Facial Features on Makeup Behavior Based on Interpersonal Interactions of Makeup

KUSHIMA Noriko and KAMISE Yumiko

Abstract

Women's faces were actually measured and classified according to Kushima/Saito's (2015a,b) facial features impression model in this study. It was examined if differences in facial features generated differences in makeup behavior and interactions with others. Results showed that differences were seen between women with feminine facial features and women with masculine facial features. Rate of concordance between actual face and self cognition among women with feminine features was high. Their makeup was assertive. They were strongly evaluated and role expectations were set. Rate of concordance between actual face and self cognition among women with masculine features was low. Their makeup was submissive, and it was suggested that evaluation and role expectations were not as strong.

[Keywords] Makeup, Impression, Gender role, Interview Survey

キーワード：顔・化粧・印象・性役割・インタビュー調査

本研究では、実際に女性の顔を計測し、九島・齊藤（2015a,b）により提示された顔の形態印象モデルに基づき顔を分類し、その顔形態の違いによりメイク行動及び他者との相互作用に違いが生じているのかについて検討していく。

化粧の対人的効用

これまで社会心理学の分野では、化粧⁽¹⁾の意義や効用を見出すための研究が数多くなされてきた。代表的な研究として松井・山本・岩男（1983）は、化粧の効用について「化粧中の満足」、「対人的効用」、「心の健康」の3つに大別された13の仮説について検討しており、調査対象者の化粧品の使用アイテム数により化粧度（H,M,L）として群分けをし、化粧度別に分析をしている。その結果、化粧度が高い程、化粧の効果を自覚する人が多くなるという関連を見出し、「化粧行動のもつ心理的効果の構造」モデルとしてまとめている。このモデルでは、「対人的効用」が「心の健康」をもたらすことを示している。そしてその「対人的効用」は、外見的欠陥の補償、外見的評価の上昇・同性への意識、異性の魅力度の上昇、自己顕示欲求の充足、周囲への同調、期待への対応、社会的役割への適合、伝統的性役割に基づく identity の自覚の8つに整理されている。

化粧の対人相互作用

化粧の効用に関して、上記以外にもいくつかの代表的なモデルが提示されてきている。先ず、大坊（1997）の、粧（装）いの対自的・対人的「効用」の循環のモデルでは、化粧は自分のためと他者のための2つのルートがあるという見

* 1 立正大学大学院心理学研究科心理学専攻

* 2 立正大学心理学部教授

解が示されている。このモデルでは、粧（装）いが自己から他者へと一方向に向けられ、役割も粧う者から他者へ一方向に設定されている。一方、菅原（1993）による、アイデンティティの自覚と外見の効果のモデルは、化粧が対人行動に影響する過程について、相互に関連した自己の目と他者の目のフィードバックループによって説明されている。さらに、木戸（2015）のナラティブモデルは、化粧行為を「化粧当事者」と「宛先となる人」の間に立ち現れるものとして位置づけ、自己は他者へ向かう行為として化粧をし、他者は、そのナラティブを受けて何らかのフィードバックを化粧行為の当事者にかえす円環的なモデルを提出している。このように、化粧が他者との相互作用の中から対人的効用をもたらすことがいくつかのモデルから説明が試みられてきた。

ただし、どのような化粧がどのような影響を他者に与えているのかについては、元々の顔（顔形態）によって違うことも最近明らかになっている。例えば、九島・齊藤（2015a,b）は、顔の形態印象モデル（Figure 1）を提示し、顔形態とメイクの組み合わせにより対人印象及び対人関係に与える影響が異なることを見出している。しかし菅原（1993）や木戸（2015）のモデルでは、回答者自身の個人の外見特徴、顔の形態的な特徴は要因として含まれていない。顔形態の違いにより他者へ与える印象が異なる（九島・齊藤（2015a,b））ことをふまえると、化粧に関する従来のモデルについても、個人の顔形態の違いを要因として含め再検討することが必要と考える。そこで、本研究では、九島・齊藤（2015a,b）に基づき実際に女性の顔を計測し、その顔形態の違いにより、化粧行動及び他者との相互作用に違いが生じているのかについて検証していく。

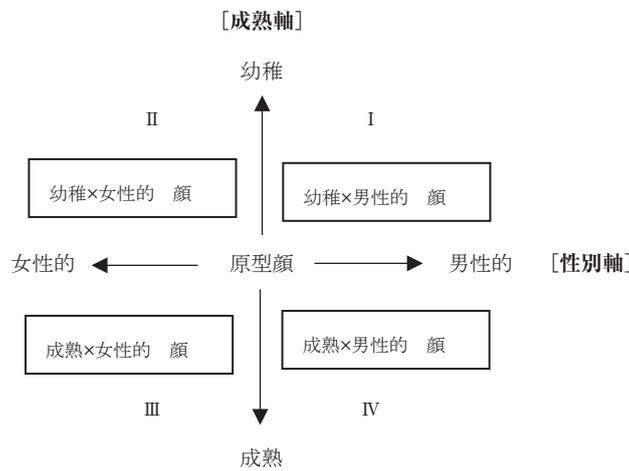


Figure 1 顔の形態印象モデル（九島・齊藤, 2015b）

顔の形態印象モデル 成熟性（幼稚もしくは成熟）の顔特徴をY軸にとり、成熟軸とし、性的二型性（男性的もしくは女性的）の顔特徴をX軸にとり、性別軸とした。この2つの軸の座標上では、第1象限に幼稚的・男性的な特徴の顔（以降、幼男と表記）、第2象限に幼稚的・女性的な特徴の顔（以降、幼女と表記）、第3象限に成熟的・女性的な特徴の顔（以降、成女と表記）、第4象限に成熟的・男性的な特徴の顔（以降、成男と表記）が置かれた。

顔の形態的特徴と化粧の対人的効用

顔形態の違いにより、化粧の対人的効用や他者との相互作用に違いが現れるかを検討するにあたり、本研究では、「化粧に関する自己過程」と「他者からのフィードバック」の2つの過程に焦点をあてる。

まず第1の「化粧に関する自己過程」については、「顔形態の自己認知（自分の顔をどのようなものとして認識するか）」、「メイク行動（どのようなメイクをするのか）」の2つの側面から分析する。このうち「顔形態の自己認知」については、九島・齊藤（2015a,b）をふまえて、自己の顔形態をどのようなタイプとして認識しているのか、さらに実際の顔形態と自己認知との一致・不一致を取り上げて検討する。その一致性については、化粧に関する自己過程において重要であることと考えたこと、また、その一致性の有無によりメイク行動に違いが生じると予測したためである。もう一方の「メイク行動」として分析するのは、メイクアイテム数とメイクの所要時間、メイクをする理由である。菅原（2001）により整理されている通り、メイク行動は皆一様ではなく、メイクアイテム数が個人により異なること、メイクアイテムの数は年齢、職業、性格傾向などにより異なることが明らかにされてきた。本研究ではメイクアイテム数とメイクの

所用時間が、メイクをどの程度重要なものとして回答者が考えているかの指標となると考え、分析要因とした。また、これらの行動だけでなく、メイクをする理由について尋ねることで、メイク行動に対する態度を把握できるものと考えて分析要因に含めた。なお、本研究では「顔形態の自己認知」の後に、「メイク行動」が生じるものと位置付けて分析を進めた。

第2の「他者からのフィードバック」については、本研究では他者からの外見への「印象評価」と「役割期待」の2つの側面を分析する。このうち他者からの「印象評価」については、他者から外見についてどのような印象を持たれていると考えているのかをたずね、顔形態との関連を検討する。九島・齊藤（2015a・b）において、顔の形態的特徴の違いにより与える印象が異なることが見出されている。具体的には、男性的な顔は男性的な印象に、大人っぽい顔は大人っぽい印象をあたえることが明らかになっている。したがって、本研究が注目する「他者からの印象評価」においても、男性的な顔は男性的な印象に、大人っぽい顔は大人っぽい印象を持たれるものと予測する。これについて本研究では、対象者に他者からどのように評価されていると思うのかを尋ね、顔形態との関連を分析する。もう一方の他者からの「役割期待」の側面については、他者からどのような役割を期待されていると考えているのかをたずね、顔形態との関連を検討する。上記の他者からの「印象評価」と同様、他者からの「役割期待」においても、男性的な顔は男性性役割が、女性的な顔は女性性役割が期待されるものと予測する。これを確認するため、性役割に関する価値観を測定する伊藤（1978）のM-H-F scaleを使用し、どの程度性役割を期待されていると思うのかを尋ね、顔形態との関連を分析する。

目的

本研究では実際に女性の顔を計測し、九島・齊藤（2015a,b）により提示された顔の形態印象モデルに基づき顔を分類し、その顔形態の違いによりメイク行動及び他者との相互作用の違いが生じているのかについて検討していくことを目的とする。

方法

本研究では、実際に女性の顔を計測、分類し、分析を試みる。顔の計測は、とても個人的なことであるため、その個人のプライバシーが守られる必要がある。このプライバシー保護を重視し、かつ化粧行動についてより詳細に検討するために、本研究では調査協力者に、個別に半構造化インタビューを行い、その際に質問紙調査にも回答を求める形とした。

調査協力者

調査協力者は、スノーボール・メソッドの手続きにより募り、27歳から33歳までの女性26名（ $M=29.12$, $SD=1.58$ ）であった。⁽²⁾ Table 1 に調査協力者の概要を示す。

手続き

2014年7月から11月にかけて、1名ずつの半構造化インタビュー及び質問紙調査を行った。調査協力者の方には事前に、研究の趣旨を説明する文書を直接配布もしくはメールに添付して送った。そして協力の了解を頂けた方には、都内のヘアメイクスタジオへ来てもらいインタビューを行った。また、インタビューの前に、インフォーマントの権利について、プライバシー保護について、面接結果の公表についての確認事項等を記した面接承諾書に問題が無ければサインをしてもらい、インタビューを開始した。インタビューと質問紙調査に要した時間は1時間半から2時間半であった。調査の流れは、初めに、一部の質問紙調査に回答をしてもらい、次いでインタビューに入った。インタビュー終了後に、残りの質問紙調査に回答をしてもらい、最後に、顔の計測を行い、顔写真を撮影した。

質問紙調査の項目

- 1 自覚された印象評定 印象評価に関する項目は、九島・齊藤（2015a,b）の24項目を使用した。この項目について、初対面の人からどのような第一印象を持たれていると思うのかを、5件法で評価を求めた。
- 2 自覚された性役割期待 性役割に関する項目は、伊藤（1978）のM-H-F scaleの30項目を使用した。この項目につ

Table 1 調査協力者概要

	年齢	婚姻	子供	学歴	職業	調査実施時期
Aさん	28	未婚	無	4年生大学	児童福祉	2014年7月
Bさん	28	既婚	無	4年生大学	会社員（営業）	2014年7月
Cさん	27	未婚	無	4年生大学	福祉	2014年7月
Dさん	29	未婚	無	4年生大学	銀行員（事務）	2014年7月
Eさん	27	未婚	無	大学院	大学職員	2014年7月
Fさん	28	未婚	無	4年生大学	会社員（事務）	2014年7月
Gさん	30	未婚	無	4年生大学	会社員（営業）	2014年7月
Hさん	30	未婚	無	4年生大学	会社員（営業事務）	2014年7月
Iさん	29	未婚	無	4年生大学	会社員（事務）	2014年7月
Jさん	30	未婚	無	4年生大学	会社員（販売）	2014年8月
Kさん	28	未婚	無	4年生大学	児童福祉	2014年8月
Lさん	32	未婚	無	大学院	会社員（研究）	2014年8月
Mさん	32	未婚	無	大学院中退	研究員	2014年8月
Nさん	28	未婚	無	4年生大学	銀行員（事務）	2014年8月
Oさん	31	既婚	無	高校	会社員（販売）	2014年9月
Pさん	30	既婚	無	4年生大学	会社員（受付）	2014年10月
Qさん	28	既婚	無	4年生大学	会社員	2014年10月
Rさん	28	未婚	無	短大	看護師	2014年10月
Sさん	28	未婚	無	4年生大学	会社員（営業）	2014年10月
Tさん	33	既婚	無	専門学校	セラピスト	2014年11月
Uさん	28	未婚	無	高校	学生	2014年11月
Vさん	28	未婚	無	4年生大学	会社員	2014年11月
Wさん	30	既婚	無	4年生大学	看護師	2014年11月
Xさん	28	既婚	無	4年生大学	アルバイト	2014年11月
Yさん	30	未婚	無	4年生大学	幼稚園教諭	2014年11月
Zさん	29	既婚	無	4年生大学	家事手伝い	2014年11月

いて、最も影響力のある人物1名を記述してもらい、その人物から30項目についてどの程度期待されていると思うのかを5件法で回答を求めた。

インタビュー調査の項目

- 1 顔形態の自己認知 インタビューの冒頭で顔の形態に対する自己認知についてたずねた。九島・齊藤（2015a,b）で提示された顔の形態印象モデルのマトリックスを示し、自己認知している顔形態の布置を指で指し示すよう求めた。
- 2 メイク行動 ふだんのようなメイクをしているのかについて、その理由、所要時間、使用アイテムなどの回答を求めた。

調査協力者の顔の計測

面接終了後に、調査協力者の顔の計測を行った。九島・齊藤（2015a,b）の顔の形態印象モデルに基づき、顔の縦の長さ、横幅、顔の縦バランス（3か所）、横バランス（5か所）について計測した。

結 果

調査協力者の顔形態特徴

調査協力者に対して行った顔の計測結果を、九島・齊藤（2015a,b）に基づき、協力者を4つの顔形態に分類した。具体的な手続きは以下の通りである。まず、顔の縦横比、顔の縦バランス、横バランス配置の指標をもとに、それぞれの

協力者の顔について「幼女」「成女」「幼男」「成男」の4指標の得点を算出した (Table 2)。

Table 2 顔形態特徴による分類表

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん	Iさん	Jさん	Kさん	Lさん	Mさん	Nさん	Oさん	Pさん	Qさん	Rさん	Sさん	Tさん	Uさん	Vさん	Wさん	Xさん	Yさん	Zさん
幼女	2	2	4							1		1	3	1	2		2	2	1	2	1	1	1	3	1	4
成女		3					1	3	3		1			4	3		3	1		3		1				
幼男	3	2	2	2	3	2	1	1	2	4	2	4	2		2	1	2	1	4	2	4	3	3	2	3	3
成男	1	1		3	4	3	3	2	2	2	3	2	1	3	1	3	2		2		2	1	2	1	2	

次に、「幼女」「成女」「幼男」「成男」の4指標のうち最も数値が高かったものを、個人の顔の特徴と位置付け、「幼女」「成女」「幼男」「成男」の4つのカテゴリのいずれかに振り分けることとした。その統計的検証を得るため、数量化Ⅲ類に基づく双対尺度法を行った (Figure 2)。その際、調査協力者をサンプルとし、4つの顔形態をカテゴリとした。

その結果、九島・齊藤 (2015a,b) の形態印象モデルと同様、縦軸が成熟軸、横軸が性別軸と解釈された。また、調査対象者の布置をみると、全体として大きく4つの群にまとまっていた。成熟軸・性別軸における位置付けをふまえ、それぞれは幼稚的・男性的な特徴の顔を持つ人の群 (8名)、幼稚的・女性的な特徴の顔を持つ人の群 (5名)、成熟的・女性的な特徴の顔を持つ人の群 (7名)、成熟的・男性的な特徴の顔を持つ人の群 (6名) と解釈された。本研究では、この結果をもとに、調査協力者の顔形態を分類した。なお、この結果から、4指標のうち最も数値の高かった顔特徴に振り分けた上記の手続きが妥当であったことが示唆された。

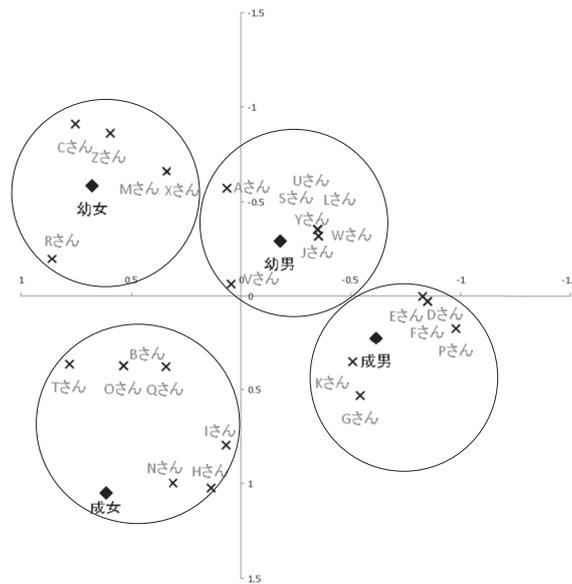


Figure 2 顔形態特徴による4分類

(注：プロットの×印は同ポイントの場合には重なっている)

顔形態と自己認知の関連

自己認知について、まず全体では、実際の顔形態特徴と自己認知している顔形態特徴が一致していた人が13名、不一致であった人が13名であった。

次に、4つの顔形態別に、実際の顔形態特徴と自己認知している顔形態特徴が一致しているのか検討した。幼女、成女、幼男、成男の4つの顔形態の違いによる実際の顔と自己認知の一致性について、 χ^2 検定を行ったところ (Table 3)、有意差がみられた ($\chi^2(3)=10.54, p<.05$)。残差分析により、成女の顔形態特徴の人は、実際の顔と自己認知が一致している人が有意に多く、幼男の顔形態特徴の人は、実際の顔と自己認知が不一致な人が有意に多くなることが明らかになった。

なお、有意差は出していないが、幼女顔は自己認知が一致している人が多く、成男顔は自己認知が不一致な人が多かった。

このことから、全体として、女性的顔特徴の人たちは、自己認知が一致し男性的顔特徴の人たちは自己認知が不一致な人が多い傾向がみられると論考し、さらに女性的顔特徴と男性的顔特徴の2つの群に大別し、自己認知との一致を分析した。

Table 3 顔形態の違いによる自己認知の違い

			実際の顔と自己認知		合計
			一致	不一致	
顔形態特徴	幼女	度数	4	1	5
		調整済み残差	1.5	-1.5	
	成女	度数	6	1	7
		調整済み残差	2.2 *	-2.2 *	
	幼男	度数	1	7	8
		調整済み残差	-2.5 *	2.5 *	
	成男	度数	2	4	6
		調整済み残差	-0.9	0.9	
合計	度数	13	13	26	

** $p < .05$

女性的顔特徴と男性的顔特徴の2つの顔形態の違いによる実際の顔と自己認知の一致性についてのクロス集計表及び χ^2 検定の結果をTable 4に示す。2×2の χ^2 検定の結果、顔形態による自己認知の一致性に有意差がみられた($\chi^2(1) = 9.90, p < .01$)。残差分析より、男性的な顔形態特徴の人は、実際の顔と自己認知が不一致な人が有意に多いこと、女性的な顔形態特徴の人は、実際の顔と自己認知が一致している人が有意に多いことが明らかになった。

Table 4 男性的・女性的顔形態特徴の違いによる自己認知の違い

			実際の顔と自己認知		合計
			一致	不一致	
顔形態	男性的	度数	3	11	14
		調整済み残差	-3.1 **	3.1 **	
	女性的	度数	10	2	12
		調整済み残差	3.1 **	-3.1 **	
合計	度数	13	13	26	

** $p < .01$

顔形態の違いによる印象評価への影響

印象評価について、他者からどのような印象評価をされていると感じているのかは、顔形態特徴により異なるかを検討するため、成熟軸(幼稚-成熟)と性別軸(男性的-女性的)を独立変数、印象評価下位尺度(「人柄」「若さ」「知性」「女性性」)を従属変数とした2×2の分散分析を行った。その結果、若さは、性別軸で主効果が有意傾向であり($F(1,22) = 3.39, p < .10$)、女性的顔特徴の人たちが男性的顔特徴の人たちよりも若い印象を他者から持たれやすいと認知していることが示された。女性性は、成熟軸の主効果が有意傾向であり($F(1,22) = 3.07, p < .10$)、幼稚的顔特徴の人たちが成熟的顔特徴の人たちよりも女性的な印象を他者から持たれやすいと認知していることが示された。

顔形態の違いによる期待される役割への影響

役割期待について、他者からどのような役割を期待されていると感じているのかは、顔形態特徴により異なるかを検討するため、成熟軸(幼稚-成熟)と性別軸(男性的-女性的)を独立変数、性役割を従属変数とした2×2の分散分析を行った。その結果、男性性の役割期待において性別軸で主効果が有意傾向であり($F(1,22) = 3.48, p < .10$)、女性的顔特徴の人たちが男性的顔特徴の人たちよりも男性性の役割期待を感じていることが示された。なお、女性性の役割期待については有意な交互作用がみられた($F(1,22) = 5.45, p < .05$)。単純主効果の検定の結果、幼稚群における性別軸

の単純主効果 ($F(1,22)=8.47, p<.01$) と、女性的群における成熟軸の単純主効果 ($F(1,22)=8.40, p<.01$) が有意であり、女性的かつ幼稚的な顔特徴の人たちが最も女性性の役割期待を感じていることが示された。

顔形態特徴の違いによるメイク行動への影響

メイク行動について、メイクのアイテム数およびメイクにかかる所要時間は、顔形態特徴により異なるかを検討するため、成熟軸（幼稚－成熟）と性別軸（男性的－女性的）を独立変数、メイクに関する基本情報を従属変数とした 2×2 の分散分析を行った。その結果、プライベートにおける化粧品のアイテム数使用については、有意な交互作用がみられた ($F(1,22)=7.40, p<.05$)。単純主効果の検定の結果、幼稚群における性別軸の単純主効果が有意であり ($F(1,22)=10.12, p<.01$)、男性的群、女性的群における成熟軸の単純主効果がそれぞれ有意傾向であった ($F(1,22)=3.26, p<.10$; $F(1,22)=4.14, p<.10$)。これらから、男性的かつ幼稚的な顔特徴の人たちが最も化粧品のアイテム数を使用していることが示された。

インタビューからみる顔形態特徴の違いによるメイク行動への影響

さらにメイク行動の動機、理由については、顔形態特徴により異なるかを検討するため、インタビュー調査を行った。インタビューでは、普段のメイクについて、どのような点を重視してメイクをしているのか、また、メイクをする理由についてたずねた。インタビューの回答から、顔形態特徴の違いによりメイク行動の違いが見受けられた。以下にそれぞれの顔形態ごとのメイクについての発言を抜粋する。(Table 5・Table 6・Table 7・Table 8)

Table 5 幼女顔特徴の人たちのメイクの重視する点・メイクをする理由についての回答例

Cさん：かわいく、きれいに見られたい。とにかく整っているようにみられたい。自分に自信がないから、外見だけでも、ちょっとでもって思う。

Mさん：血色をよく見せるように、ほっぺたに頬紅をすること、眉毛を描く。肌がきれいに見えるといいな。素颜に見えるようなメイクが好き。第3者の人に見られた時に好印象がもらえるかなあ。人に見られるとき。あとは鏡に映った自分を見たときにもきれいな方が幸福感が。

Rさん：チークですかね。顔色がよく見えるからですかね。

Xさん：アイメイク。がいかに、老けて見せるか。元々の顔をたぶんいかすと、本当に幼くなってしまうので、少しでもキリッとした印象を与えようとしています。昔からずっと、年齢より上の人間でいたい、大人びていたい、みたいなのが、ずーっと10代の頃からあって、完成された人間像、への憧れがあるからだと思いますね。

Zさん：目。目が一番気を遣ってます。自分をよく見せようとしてるのかな。いい印象を持って欲しい。柔らかい印象かな、接しやすい親しみのある、明るい、元気な、何だろうな、かわいって思って欲しいのかな。

Table 6 成女顔特徴の人たちのメイクの重視する点・メイクをする理由についての回答例

Bさん：目がはっきりするような。ん～。やっぱり仕事で人と目を見て話すことが多いので、比較的、意志が伝わりやすいように、目に力を入れたって感じですかね。印象に残りやすくなると思うからかな。話した時の印象に目が残ればいいかなあと思って。話とセットで自分を覚えてもらえる。仕事にとってプラスかな。営業だから、他の人よりも覚えてもらうために。

Hさん：自然な、派手にならない感じになるようにっていうのと、目がはっきりするようにメイクしてます。雑誌とか見ても、目がパッチリしてはっきりしているモデルさんがかわいし、目が大きく見えるようにしたい。きれいだなあと思う人はみんな目がぱっちりしていてかわいい。かわいい人、きれいな人は、見ていると、あ～素敵だなんて思うし、周りからもキレイだよ、と言われると自分も気分がよくなるだろうし、色々得することが多そうだな。って感じですね。

Iさん：口紅やアイシャドーを塗るようになった。きれいでいたいから。それが前提にあって、あとは、若くいたいとか、昔よりどんどんきれいになりたいと思っているから。気分を上げたいのと、人の目が気になって、いい風に見せたいって。

Nさん：お客さんと接する仕事なので、それなりに仕事してますという感じには一応しないと、とは思っています。

Oさん：若々しく見える感じ。やっぱりチークをピンク系にしたりするのとか、あと、アイラインを茶色にしたのは自分の中では大きい点だと思います。柔らかく見えるように茶色にしました。男性的目線で、若々しく見られたい、可愛く見られたい、モテたいということです（笑）そういう人は愛され続けていられるだろうって思うので。誰からも可愛いものは愛されるから。柔らかくみられたいっていうのは女性にですね。

Tさん：メイク自体はあまり気をつけてないんですけど、やるとやらないとは違う、大人になって、仕事をしていて、ONのスイッチ、ノーメイクはOFF、人がONなのに自分がOFFなのは失礼。

Table 7 幼男顔特徴の人たちのメイクの重視する点・メイクをする理由についての回答例

Aさん：目元。目が細いので大きくなったらいいと思って。目が細いときつく見えるし、クールっぽく、大人っぽく見えてしまうから。性格がクールでキチキチしてるから。見た目だけでも柔らかく、人当たり良くしたいし。仕事のにも。

Jさん：けばくなりすぎないように、でもメイクはしている感じは残すように。アイメイクしすぎない。厚塗りにならないように。一重で目つきが悪いから、普段はアイプチで二重にして、アイメイクもきつくならないようにして。

Lさん：人に不快を与えない程度に。

Sさん：目元を結構、ラインを引いたりとか、色使ったりとかっていうのをよくやります。

Uさん：ベース、肌の感じですかね。最近はやはり、シミかなと思ったりあるんで、ベースメイクに気を遣いますね。

Vさん：アイラインはすごく気になって、無いと目が貧相過ぎて、うわっこれはってなっちゃうから。

Wさん：今はあれですね、肌とかですかね。

Yさん：目、目ですかね。一重なので、大きく見えるようにとか、パッチリ見えるようにとか。肌。シミとかニキビ痕とか、うまく隠せるといいな、って思ってます。

Table 8 成男顔特徴の人たちのメイクの重視する点・メイクをする理由についての回答例

Dさん：化粧しているなってわかるぐらいにはしています。社会人として。目がきついから、たれ目気味に。性格がきついから、顔もきつくて性格もきついとだいぶ攻撃的になっちゃうから、顔を柔らかくしておけばいいかなって。

Eさん：すっぴんでは行きたくない。人の目は気にして...

Fさん：肌荒れを隠すようにすると、目をパッチリ見えるように、きつく見られたくないから。

Gさん：すっぴんに近い感じ。ナチュラルメイクの方が印象がいいという方程式が私の中にあって。男社会だから。仕事じゃなくても普通、人は外見で見るから、鼻につかない程度にきれいに。

Jさん：けばくなりすぎないように、でもメイクはしている感じは残すように。アイメイクしすぎない。厚塗りにならないように。一重で目つきが悪いから、普段はアイプチで二重にして、アイメイクもきつくならないようにして。

Kさん：日焼けしないように。日焼けしたら、おばあちゃんになった時しみだらけになっちゃういそうだから。

インタビューの回答から、顔形態特徴の違いによりメイク行動の違いが見受けられ、幼女顔の人たちは、メイクにより気になる部分の補正、完璧な姿の演出を求めていることが示唆され、成女顔の人たちは、他者からの印象や仕事上の印象をよくするためのメイク、幼男顔の人たちは、肌をきれいに見せるメイクもしくは目元を強調するメイク、成男顔の人たちは、顔のきつさを和らげるためのメイク、またはマナーとしてのメイクをしていることが示唆された。特に、女性的顔特徴を持つ人達の多くが印象を良くするための積極的なメイクを行い、男性的顔特徴を持つ人たちの多くがコンプレックスなどを減じるための消極的なメイクをする傾向があることがうかがわれた。

考 察

本研究では、実際に女性の顔を計測し、九島・齊藤（2015a,b）により提示された顔の形態印象モデルに基づき顔を分類し、その顔形態の違いによりメイク行動及び他者との相互作用に違いが生じているのかについて検討した。検討にあたり、「化粧に関する自己過程」と「他者からのフィードバック」の2つの過程に焦点をあてた。

化粧に関する自己過程

本研究では、「化粧に関する自己過程」を「顔形態の自己認知」と「メイク行動」の2つの側面から分析した。

まず、「顔形態の自己認知」については、顔の計測により実際の顔と自己認知している顔の形態特徴の一致性について

検討した。その結果、実際の顔形態特徴と自己認知している顔形態特徴の一致性は、女性的顔特徴を持つ人たちは男性的顔特徴を持つ人たちに比べ、実際の顔と自己認知が一致している人の割合が多いことが明らかになった。その要因として、女性的顔特徴の人たちは男性的顔特徴を持つ人たちに比べ、他者からの外見に対する印象評価や役割期待など、外見に対する反応をより多く受け取っているため、自己の外見に対する客観的評価を知る機会が多く、客観的視点を持つチャンスがあるものと推察された。一方の男性的顔特徴の人たちの自己認知の不一致の要因として、女性的顔特徴の人たちに比べ、他者からのフィードバックが希薄であることが挙げられ、自己の外見について客観的評価を知る機会が少なく、客観的視点を持つチャンスが少ないものと推察された。

次に、「メイク行動」については、メイクアイテム数とメイクの所要時間について検討した。その結果、化粧品アイテム数については、男性的かつ幼稚的な顔特徴の人たちが最も化粧品のアイテム数を使用していることが示されたが、メイクにかかる所用時間に関しては、顔形態的特徴により違いは見られなかった。メイクの重要度については、顔形態特徴による違いは見られないことが示唆された。

さらに、インタビューの回答から、顔形態の違いにより、メイクをする上で重視する点やメイクをする理由などのメイク行動に違いが生じることが明らかになった。メイクには、印象を良くするための積極的なメイクとコンプレックスなどを減じるための消極的なメイクがあることが明らかになった。またそれは、男性的顔特徴を持つ人たちの多くが消極的メイクを行い、女性的顔特徴を持つ人達の多くが積極的メイクをする傾向があることが明らかになった。

化粧の基本的な働きは、「隠す」と「見せる」という二つの要素から成り立っている（村澤，2001）。村澤（2001）によると「隠す」は、自己の欠点や弱点をカムフラージュすることを意味し、その範囲は、シミやソバカスをファンデーションでカバーすることだけでなく、（口紅一本さしただけでも）素顔をむき出しにしていないと思える心理的なことも無視できないと指摘している。一方、「見せる」は、より積極的な行為で、新たな自己を表現して見せることだとし、血色のよい健康さを出したり、美しく魅力的にすることなどが当てはまるという。本研究における消極的メイクは、コンプレックスに感じている顔の部位をカムフラージュする「隠す」化粧となり、積極的メイクは、自己をより魅力的に「見せる」化粧で自己表現をしていると言える。

本研究では、女性的顔特徴を持つ人達の多くが積極的メイク、男性的顔特徴を持つ人たちの多くが消極的メイクを行う傾向があることが明らかになったが、これは上述の通り、女性的顔特徴を持つ人たちの多くが男性的顔特徴を持つ人たちに比べて、他者からのフィードバックがあるため、自分がどのような外見をしたらどのような印象を持たれるのか、また、期待に応えるためにはどのような外見にしたらよいのかをより理解しているため、積極的にメイクを活用しているものと推察される。

他者からのフィードバック

「他者からのフィードバック」は、他者からの外見への「印象評価」と「役割期待」の2側面から分析した。

まず、他者からの「印象評価」について、本研究では他者からどのような印象評価をされていると感じているのか、顔形態特徴により異なるかを検討した。その結果、男性的顔特徴の人たちよりも女性的顔特徴の人たちの方が、若く女性的な印象を他者から持たれやすいと認知していることが明らかになった。この結果は、九島・齊藤（2015a）の結果を支持するものであった。また九島・齊藤（2015a）において、顔の分類の際に用いた刺激は、イラストという2次元のものであったため、分類の妥当性を検討する必要性が指摘されていた。本研究は、調査協力者の実際の顔を九島・齊藤（2015a）の手続きに沿って分類したものである。その結果として、調査協力者が「幼女」「成女」「幼男」「成男」の4つの顔形態へ分類がなされたことから、九島・齊藤（2015a）の顔特徴分類と分類方法が適切であり、2次元だけでなく、実際の人物の顔へも適用可能であることが示されたと考える。

次に、他者からの「役割期待」については、他者からどのような役割を期待されていると考えているのかをたずね、顔形態との関連を検討した。その結果、女性的かつ幼稚的な顔特徴の人たちが、最も女性性の役割期待を感じていることが示された。その一方で、女性的顔特徴の人たちが男性的顔特徴の人たちよりも男性性の役割期待をも感じていることが示された。本研究では当初、女性的な顔形態特徴の人たちには、女性性の役割が、男性的な顔形態特徴の人たちには男性性の役割が期待されるものと予測していた。しかし実際には、男性性女性性どちらの性役割も、女性的顔特徴の人たちの方が男性的顔特徴の人たちよりも、他者から期待されていると感じていたことが明らかになった。ただし、本

研究ではこの役割期待について、他者からどのような役割を期待されていると思うのかを、調査対象者の判断により回答してもらったため、現実場面において他者が実際にどのように判断しているのかは未知数である。しかし、本研究において、女性的顔特徴の人たちが他者からの役割期待を受け取りやすい傾向にあるという示唆は得ることができた。また、本研究では、女性的顔特徴の人たちの方が、より積極的なメイクをしていたことが明らかになったことから、女性的顔特徴の人たちの方が他者からの役割期待を自覚し、さらに、期待に応えようとしている可能性が示唆された。

このように、女性的顔特徴を持つ人たちの多くが男性的顔特徴を持つ人たちに比べて他者からどのように見られているのか、どのような役割を期待されているのかを自覚していたため、自分がどのような外見をしたらどのような印象を持たれるのか、また、期待に応えるためにはどのような外見にしたらよいのか、経験的に獲得している可能性が示唆された。

顔の形態特徴と化粧の対人相互作用および化粧の対人的効用

以上をまとめると、まず当事者の顔形態特徴があり、その顔形態特徴に対する他者からの反応（印象評価・役割期待）が生じ、その反応に対する当事者の顔形態特徴への意識（役割・アイデンティティの自覚）が生じ、メイクなどの外見に対する行動（他者からの反応に応える）が生じる。さらにその顔形態特徴に対する他者からの反応（印象評価・役割期待）があり、さらにそれにより新たなメイク行動が生じる……と繰り返される一連のプロセスが存在していると推察される（Figure 3）。

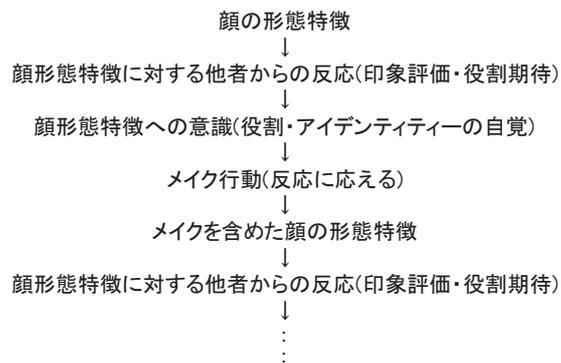


Figure 3 顔形態特徴に関する対人相互作用の流れ

さらに、Figure 4 に示した通り、その他者との相互作用の強さは、顔の形態特徴の違いにより異なることが示唆された。特に女性的顔特徴の人たちと、男性的顔特徴の人たち間で違いがみられた。女性的顔特徴の人たちは、実際の顔と自己認知が一致している割合が高く、積極的なメイクをしており、他者との相互作用についても、他者からの評価や役割期待を強く受けている。つまり、積極的なメイクにより、他者からの強い反応（印象評価・役割期待）があり、それにより、外見への意識（アイデンティティの自覚）を強くし、反応に応えるために、さらに積極的なメイク行動に出るということである。一方、男性的顔特徴の人たちは、実際の顔と自己認知が一致していない割合が高く、消極的なメイクをし、他者との相互作用については、他者からの評価や役割期待を女性的顔特徴の人たちに比べて受けていない。消極的なメイクが消極的なフィードバックを生み、さらに消極的なメイク行動へとループし続けることで、菅原（1993）の述べている通り、この連続したループが自己の外見だけでなく内面も強化していく可能性がある。

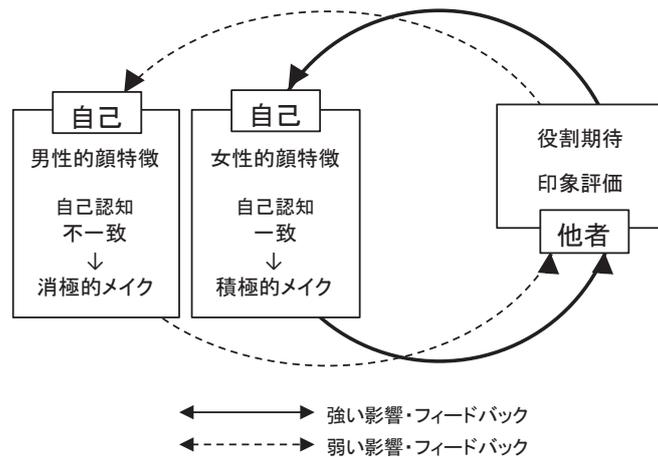


Figure 4 メイクの対人相互作用

化粧の対人的効用とメイクによる自己実現

菅原（1993）は、内面が外見を作り出すだけでなく、外見が内面を作り出す可能性を示している。また、菅原（2001）も、外見の変化は他者に与える印象を変化させ、他者からの新たな反応を引き出し、その反応を受け取って個人は自分が期待される立場や役割をますます強く認識し、この認識が自己の外見や立ち居振る舞いをそれらしく変えていく、一種の「自己成就的予言」の過程であると論じている。また、高野（2001）は、理想の顔と理想の性格の間には正の相関があることを明らかにした上で、メイクによって理想の自己イメージを顔に表現することで、心自体も理想に近づくのではないかと見解を述べている。このように、メイクがイメージする自己像へ導いてくれる可能性もある。

ただし、化粧には両面効果があるため（大坊，1997）、化粧によっては、期待するフィードバックを得られない、期待に反するフィードバックがあるなど、化粧をする事が逆効果になる可能性も否めない。また、化粧の良し悪しに関わらず、他者からの評価が低い場合には、化粧の効果はマイナスに転じる。そのため、自己の顔形態の特徴を認識し客観視できていること、その上で望むイメージに合わせたメイクをしていくことが重要である。メイクが上手く作用すれば、従来から指摘されている化粧の対人的効用を得られ、延いては、心の健康という効用も得られる可能性もある。

本研究の問題と今後の課題

本研究では、インタビューを中心とした個別的な調査を行い、実際に調査対象者の顔を計測することで、顔形態の違いによりメイク行動に影響が生じることが示唆された。化粧の対人相互作用についても、女性的顔特徴の人たちと、男性的顔特徴の人たちの間で違いがみられた。しかし、化粧の対人相互作用についてより厳密に検討するためには、一時的な調査だけではなく、ある程度の時間的幅が必要ではないかと考えられる。例えば本研究において女性的顔特徴の人たちは、男性的顔特徴の人たちよりも積極的なメイクを行い、他者からの反応を受け取りやすいことが示唆されたが、これは、今始まったことでは無く、幼少期からの「かわいいね」などといった大人や他者からの外見に対する関する発言を受け、自分の外見へ注目するといった他者との相互作用の積み重ねにより、現在につながっている可能性は十分にある。そのため今後は、発達の視点をういた研究を行っていきたい。女性の発達における顔形態とメイクの関連について研究を進めていくことで、多くの女性のメイクへの取り組みの一助となれば幸いである。

引用文献

- 大坊郁夫 1997 美のこれから 魅力の心理学 ポーラ文化研究所
 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究 26, 1-11.
 木戸彩恵 2015 化粧を語る・化粧で語る. ナカニシヤ出版
 九島紀子・齊藤勇 2015b 化粧が対人印象に及ぼす影響 応用心理学研究 41, 1, 39-55.

- 九島紀子・齊藤勇 2015a 顔パーツ配置の差異による顔印象の検討 立正大学心理学研究年報 6, 35-52.
- 松井豊・山本真理子・岩男寿美子 1983 化粧の心理的効用 マーケティング・リサーチ 21, 30-41.
- 村澤博人 2001 化粧の文化誌 大坊郁夫(編) 高木修(監) 化粧行動の社会心理学 北大路書房 48-63.
- 菅原健介 2001 化粧による自己表現 大坊郁夫(編) 高木修(監) 化粧行動の社会心理学 北大路書房 102-113.
- 菅原健介 1993 メーキャップとアイデンティティー 資生堂ビューティーサイエンス研究所(編) 化粧心理学 フレグランスジャーナル社 155-160.
- 高野ルリ子 2001 メーキャップのサイエンス 大坊郁夫(編) 高木修(監) 化粧行動の社会心理学 北大路書房 90-101.

註

- 1) 化粧とは、広義には、身体加工(髪を切るなど)、色調生成(刺青など)、塗彩(メイクアップなど)に分類される(村澤, 2001)。本研究では、上記の塗彩(メイクアップ)のみを取り上げる。村澤(2001)によると、メイクアップとは、ファンデーション、アイブロー、アイカラー、アイライン、マスカラ、チークカラー、リップカラーなどを用いて、顔の形や色を変化させることである。以上を踏まえて本研究では、化粧を狭義のメイクアップと定義し、メイクと表記する。ただし、先行研究及び一般的な化粧について言及する際には、化粧と表記する。
- 2) 木戸(2015)は、女子大学生へのメイクに関するインタビュー調査では、メイクの経験が浅いため、調査に適した回答が得られなかったとしている。そのため本研究では、メイク経験のある程度有していると予測される30歳前後の女性を対象者として選定した。